



連歌年義

新編  
第一

全三冊

伊地知文庫  
文庫20  
244  
1



文庫20  
244  
1

人之處斯世也時物風土感其耳目

上海

伊地知氏書冊

悲歎百端動其情慮所以鬱乎內而  
洩乎外咨嗟而詠歎者何地無有是  
故倭歌於詩其撰雖不同所為洩其  
鬱而咨嗟詠嘆者庸何異乎而古之  
人以其古之言發之溫柔敦厚之旨  
繹如也民之秉彜者物必有則不得  
不降而之法烏體制於是分矣巧拙

海  
三

於是著矣壹是皆稽諸古而後溫柔  
敦厚之所以為教亦可知已連歌之  
於歌猶驟句之於詩耶其來尚矣則  
亦無不有法焉不可不審其體制而  
論其巧拙也今觀阪昌周所著連歌  
辨義遠稽諸古博該詳論而無遺所  
以立其法而教後生者可謂盡矣乃  
請余言弁其首余也承業先世六義

之事則嘗聞之矣八雲之事未之學  
也尚何知所謂連歌者哉唯其所以  
淺其鬱而咨嗟詠嘆以教溫柔敦厚  
之旨者何必取此舍彼且夫懂々查  
簪有唱有和至數十百言多和平之  
音而無愁苦之詞是亦斯道之所尚  
也余業已嘉昌周之志不辭而述如  
此

明和庚寅仲春

入道前權大納言菅原家長撰



津々祢歌のこゝろを結はや一わんよ、はまらよ  
や戸くらとあつぬ一そのとやんらまよ  
さねをこす急な一ををばのあ一とけ  
連乃木こもわきま一ふくたねさくあは  
くわくは一とやんらをぬのつけぬむやら  
まよふ備よひつあぬいよそむあひ  
めねをのあふふ一くや戸くらをり  
祢直よのいよらによしよむの



わさびのしづか 権業乃志あつらふとふらんあはれを  
 けしき何れぬへきまともきまより櫓のふたれむと  
 祭衣を脱ぎあはれつゝこゝ教乃こころを  
 多うはあはれぬ美の浦ゆく何業くふやく  
 むむのやういふはまゝのこゝろしむのこゝろ  
 小娘ををりこゝろいふれりそめてより十日  
 あまのひかりのしづか 乃ん志あつらふとふらんあはれを

連歌辨義卷第一

阪昌周述



○妍哉の跡を日本紀  
 一書とよむすか女と  
 同舞うとく兄安の  
 ことばに○あふの教縁  
 へ嘆美のこゝろ○小  
 娘やいられり○は  
 ーのよきこゝろあか  
 せしよふ少男よに  
 小女子あひりこゝろ  
 よくおとよふ海を流  
 小○此海をのよみ  
 らるは秋家の傳へ  
 ありあつて  
 ○古事記曰伊弉那

ある人問連歌をいづれ乃代をばしめむ  
 すねや。

答ふいふ 日本紀神代卷上曰陽

神曰云 約束曰妹自左巡吾當右巡既而分

巡相遇陰神乃先唱曰

妍哉可愛少男歎



つらふり一條禪閣の筑波問答も其う後をて  
短歌能種より連歌をばしめとわかせ給へるなり  
古今集の序子も人のよき解りてすき能をのよき  
いさよりぞみ替りてあまうひもいさよきけり  
何れも志うらば短歌能躰の寸き能をのよき能乃ハ重  
つしほもハ重垣の清が子ほりまより連歌の寸き  
いさよきいさよき能みよき能のあふふ意やの清う  
とどもるなぐてとちほりて免き名い後なるもの

かきよばく

○日本紀纂疏曰東  
曲猶言曲歌以言語  
侏離也

問連歌をえびすかといふいさよきなるや

答 先えびす歌といふ夷振のいさよき

神代卷曰味耜高彦根神光儀華艶映于二丘  
二谷之間故喪會者歌之曰或云味耜高彦根  
之妹下照媛欲令眾人知映丘谷者是味耜高  
彦根神故歌之曰

阿妹奈屢夜乙登多奈波多迺汗奈餓勢

○阿妹奈屢夜ハ天  
在之○乙登ハ弟○多奈  
波多迺ハ織女之○汗奈  
餓勢屢ハ嬰之○多磨  
ハ玉之○弥素磨屢迺ハ  
御統之○阿奈多磨



○阿奈ハ嘆美の詞多  
磨ハ玉之○波夜弥ハ早  
之○多ハ輔抱ハ谷  
二之○和抱邏須ハ渡  
○阿泥素企多伽避  
顧祢ハ味報高彦根

ルタニノミスマルノアタタマハヤミ  
屢多磨迺彌素磨屢迺阿奈陀磨波夜彌  
タニフタワタラズアチスキタカヒコ  
多爾輔抱和抱邏須阿泥素企多伽避顧  
禰

○阿磨佐箇屢ハ大辭  
之ハ枕詞  
○避奈菟謎迺ハ夷  
津女之○以和多邏  
素西渡以ハ各語瀬  
門ハ

是ハ喪ハはとハ神のふ又下照媛の高彦根神をほめあらわし  
多々歌ハもつ古今集乃序より方始あやして下照媛は  
古註よ去そは姫とい何免わらみこのめせうとの神の  
丘谷よりつてかやくをよめふえびすうなるべし  
又味報高彦  
命歌之曰  
アサカカルヒナツメノエワタラズセ  
阿磨佐箇屢避奈菟謎迺以和多邏素西  
トイシカハカタフチカタフチニアミ  
渡以嗣箇播箇多輔智箇多輔智爾阿彌

○以嗣箇播箇抱輔  
智ハ石川片淵之○阿  
弥播利和抱嗣ハ個  
張豆之○妹盧豫嗣  
尔豫嗣ハ女吉トモ  
ろハ助語之○豫利據  
祢ハ依未ね

ハリワタシメロヨシニヨシヨリコ  
播利和抱嗣妹盧豫嗣爾豫嗣豫利據祢  
イシカハカタフチ  
以嗣箇播箇抱輔智  
コノフタナクコトバライニナクヒナリト  
此西首歌辭今號夷曲此首と継てよめる  
てえびハ歌をまふ  
と後乃哥はハ先のふに継てよめる  
ともあまの(難)神代口決曰夷曲不嚴辭而詠直名  
也とあり  
ふの

ふの  
ヤカテ  
ヤカテ  
ヤカテ

す直<sup>タカ</sup>子<sup>ヨム</sup> 郷<sup>ヨム</sup>ゆゑに連歌をえびすおともいふたふべし。

問古事記神代條曰八千矛神將婚高

志國之沼河比賣幸行之時到其沼河

以賣之家歌曰夜智富許能迦微能美

許登波夜斯麻久示云其沼河日賣

未開戸自内歌曰夜知富許能迦微能

美許等云此二首のうゝ詞是も又その

おし継ぎの歌とせば連歌なりしり。

答 たゞてあうりたる代におかたふと云

ら孫をよもあまはかたけまはるは連歌なり

る一ちう何れどもいふを連歌とせばいも多う

ら古事記神武之條曰故坐日向時云然

更求為大后之美人云余大久米命見其伊

須氣余理比賣而以歌白於天皇

夜麻登能多加佐士怒素那那由久素登

賣行母多禮素志摩加牟

○夜智富許能八千矛之○迦微能美許登波神之神命者夜斯麻久尔ハ八洲國

○夜麻登能大和之○多加佐士怒素高佐志心野と云此記野と奴と云○那々由久素登賣ハ七行七人の媛女と云○梓母ハ等々の多礼表志摩加牟ハ誰ヤ一纏と云まろたすら才子と云まろたすら志ハ助語之たまハ覓人妻まきう○てといふハ妻覓り孫了ん

あまのくに七人の媛女高佐士野に遊び行ぬ伊須氣余理比賣其中にあり  
大久米命伊須氣余理比賣と見てうらやましく天皇よまのうらやましく  
余伊須氣余理比賣者立其媛女等之前乃天

皇見其媛女等而以歌答曰

加都賀都母伊夜佐岐隲互流延袁斯麻

加牟

氣余理比賣之時見其大久米命黥利目而思  
余大久米命以天皇之命詔其伊須

○加都賀都母ハヤス

うつぐハヤト○伊夜

佐岐隲氏流ハハヤク

先ミテ○延袁斯麻

加牟延ハ阿那延夜

志愛袁登古表と

ある愛ト同一ハめで候

むろ河ナリ日本紀万

葉ミテハヤ細多ク

斯ハ助語ニハハ先

立る媛女の御ミキ

とくめんとつて

●阿米都都知天地  
奇歌曰

阿米都都知杼理麻斯登登那杼佐祁流

斗米

○杼佐祁流斗米ハ  
目ノミテサケルコト  
斗米ハ利キ目マテ重  
祢トシ本文字黥利  
目トシ目レハハヤク  
トシ目レハハヤク  
トシ目レハハヤク

大久米命答歌曰

袁登賣尔多隲示阿波牟登和加佐祁流

斗米

○袁登賣尔多隲ハ  
阿波牟登ハ媛女ト  
直トシハハヤク○和加  
ハ我ニ○佐祁流斗米  
ハトシハハヤク○和加

故其孃子白之仕奉也此四首能分はドめの二首

ト上のこと畧せり  
まゝ伊須氣余理比  
賣の<sup>イ</sup>や<sup>リ</sup>ミ<sup>ミ</sup>  
る<sup>イ</sup>答<sup>テ</sup>さ<sup>ら</sup>し<sup>ヨ</sup>  
く<sup>ワ</sup>り<sup>テ</sup>媛<sup>女</sup>子<sup>ト</sup>  
小<sup>さ</sup>き<sup>ん</sup>て<sup>カ</sup>く<sup>目</sup>と  
む<sup>さ</sup>さ<sup>り</sup>え<sup>い</sup>ふ<sup>ま</sup>  
なり。

ハ祠乃あさぶ飾り禰とこまも連哥のすがこ後  
ニそい今の旋頭哥を二人<sup>フタリ</sup>してとめ禰を是<sup>ハタラ</sup>金<sup>タ</sup>連<sup>リ</sup>歌  
く八千矛<sup>ヤチノササ</sup>神の流<sup>ナ</sup>方も<sup>ハ</sup>連<sup>リ</sup>歌の禰<sup>ト</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>へ</sup>り。

同連歌を筑波の道<sup>ミチ</sup>や<sup>ハ</sup>い<sup>へ</sup>る<sup>ハ</sup>糸<sup>イト</sup>は<sup>ハ</sup>ゆ<sup>き</sup>あ<sup>は</sup>り

也

答 古事記景行之條曰云 云 號其<sup>ナニテ</sup>

ミライアヅマト 國謂阿豆麻也即自其國越出甲斐坐酒折宮  
ニ<sup>ハ</sup>チ<sup>ニ</sup>ヨリ<sup>ソ</sup>ク<sup>ニ</sup>ユ<sup>エ</sup>イ<sup>デ</sup>カ<sup>ヒ</sup>ニ<sup>イ</sup>マ<sup>サ</sup>カ<sup>ヲ</sup>リ<sup>ノ</sup>ミ<sup>ヤ</sup>ニ

之時<sup>トキ</sup>倭建<sup>ヤマト</sup>命<sup>ノミコ</sup>歌曰

途比婆理都久波素須疑<sup>チヒバ</sup>且伊久用加<sup>チ</sup>泥<sup>ニ</sup>  
都流<sup>ツル</sup>

チ<sup>フ</sup>ノ<sup>ミ</sup>ヒ<sup>ト</sup>ク<sup>ク</sup> オ<sup>キ</sup>ナ<sup>シ</sup>テ<sup>ミ</sup>ノ<sup>ミ</sup>ラ<sup>ニ</sup>コ<sup>ク</sup>  
尔其御火燒之老人續御歌曰

カ<sup>ガ</sup>ナ<sup>ヘ</sup>テ<sup>ヨ</sup>ニ<sup>ハ</sup>コ<sup>ノ</sup>ノ<sup>ヨ</sup>ロ<sup>ニ</sup>ハ<sup>ト</sup>  
迦賀那倍且用途波許許能用比途波登

素加素<sup>ソカソ</sup>

コ<sup>シ</sup>モ<sup>テ</sup>オ<sup>キ</sup>ナ<sup>ラ</sup>チ<sup>ニ</sup>ラ<sup>ズ</sup>ノ<sup>ミ</sup>ラ<sup>ニ</sup>コ<sup>ク</sup>  
是以譽其老人即給東國造云 云 日本武尊乃

新治筑波と歌<sup>ウタ</sup>を<sup>ウ</sup>ち<sup>を</sup>唱<sup>ナ</sup>へ<sup>ル</sup>者<sup>ハ</sup>老人のす<sup>ハ</sup>を

継<sup>ツ</sup>ぎ<sup>を</sup>も<sup>つ</sup>る<sup>ヨ</sup>リ<sup>ニ</sup>連<sup>リ</sup>歌<sup>ヲ</sup>を<sup>ウ</sup>ち<sup>を</sup>筑<sup>ツ</sup>波<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>ミ<sup>チ</sup>を<sup>ウ</sup>ち<sup>を</sup>い<sup>ひ</sup>て<sup>是</sup>を

○途比婆理ハ新治之  
常陸の郡乃名日本  
紀<sup>ノ</sup>理<sup>比</sup>磨<sup>利</sup>と云  
○都久波素須疑且  
ハ筑波と過<sup>リ</sup>て筑波  
も常陸の郡の名な  
ま<sup>ハ</sup>重<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>よ<sup>ハ</sup>信<sup>智</sup>  
孫<sup>ノ</sup>也<sup>ハ</sup>伊久用加泥  
都流ハ哉夜<sup>ノ</sup>禰<sup>ト</sup>  
なり。

○迦賀那倍且ハ電並  
而<sup>シ</sup>物<sup>ト</sup>を<sup>ウ</sup>ち<sup>を</sup>指<sup>ス</sup>  
と<sup>ク</sup>め<sup>テ</sup>奉<sup>ル</sup>く<sup>ヨ</sup>ハ<sup>ハ</sup>  
の<sup>ハ</sup>れ<sup>が</sup>ち<sup>う</sup>云<sup>ハ</sup>用途  
波許<sup>ハ</sup>能用<sup>ハ</sup>於<sup>テ</sup>夜<sup>ハ</sup>  
九夜<sup>ノ</sup>比途波登素  
加素<sup>ハ</sup>於<sup>テ</sup>日<sup>ハ</sup>十日<sup>ト</sup>  
日本武尊の禰<sup>ノ</sup>向<sup>ト</sup>  
合<sup>ス</sup>ル<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>筑<sup>ツ</sup>波<sup>ノ</sup>歌<sup>ト</sup>



ヒナノムキホトリサワギドヨム

東夷叛邊境騷動と尊帝身の勞を思ひ流る上

ウツリ

徳より轉て陸奥國より蝦夷既平て日高見國より

エミシスデニタヒキ

カハリ

西南より還歸し常陸とへて甲斐國に至る酒折宮

イマシ

は居り侍者も同せ給ふ流るあり其時より

サシフヒト

まうす人たりのりし乗燭人の九夜十日を必々継る

ヒトモス

○日本紀古事記大よ  
曰く小き異なり  
とあり古事記の海  
火焼の老人を乗燭人  
と云ふがや、あまを  
又んふめく志の事  
なり

サキ

たり其人能聴と美給ひて敷賞まは流るなり

アツクメグミ

おとりのさうしお流るなりや志ありめくはド

ケサウ

免ともみべし志の終る掛想のおと後くふよ

をばど免とするは世に流るありあはとるむべきなり

イタハリ

さく尊乃流勞の始りよと想像を流るなり

オモヒヤリ

一のゆるりも仰をばべきあはなり

イガナギ

又問伊弉諾伊弉册尊の妍哉乃流歌

アナニヤ

素戔鳴尊は夜句茂多菟伊弉毛夜霸

スサノヲノミコト

ヤクモ

メツ

イヅモ

ヤハ

餓岐乃流るなり陰陽はなりなり

メツ

よ流るなり流歌ありあは神武天皇

の伊須氣余理以賣と御覽給ふ流るなり

ミツナヒシ



五言山齋

塵外年光滿林間物候  
明風月澄遊席松桂  
期交情

大津皇子

五言春花侍宴

閑吟臨靈沼遊目歩  
金光澄清苔水深曉  
暖霞出年遠歌馬波共  
絃響時鳥與風聞群  
公倒載歸彭澤宴誰  
論

此外五言遊獵一首七

言述志後人聯句五言

臨終一絶あり略く河

島白王子は淡海帝の

父方の白王子は大津皇

子と詩を作す先後い

つまじや

ヒノモト

そのせりり日本詩を唱ふるはじめてたる我大

津皇子初て詩を作りしやうと日本紀あり

古今集の真名序あり志く書くるハ任申乃亂大

友皇子戦ひしうけまひ天武天皇帝志を得させ

まうり大友皇子を詩賦の權輿とせびりて大津

皇子をばはじめてあるるべし程も傳へあり

つまじや

問片歌といふはうらみや

答 古事記景行之條曰 倭建命 御歌

波斯祁夜斯和岐幣能迦多由久母章多

知久母

此者片歌也云 凡分の名は尊は沛足とありてせりり

沛分二首はつきよは沛分あり是も 歌よ多本末ありと

片分といふは歌のときをさうりありて本末はつがは

との不連歌乃一名なりハトツナ

本をつひらき終は末を継ぐ一首の分はとあり

○波斯祁夜斯ハ愛吉  
之日本紀ハ波辭枚豫  
辭とありハハ万葉ノ  
多一○和岐幣能迦  
多由ハ我家の方從之  
すりといふ万葉多  
くより○久母章多  
知久母ハ雲居立来之



を二人フタリ少く合アハすを連歌といひて、カを詠ふ一詠を  
 句レも連カ合なりといふ。文字の意も、今乃百句五十  
 句は、あるといふ。後ふいあらず。たゞをみふ一  
 貝の合アハを始ハりたるを、かゝる貝といふ。同。  
 八雲御抄云。むづい百韻五十韻と、はくは、こゝに  
 ちよふし。ちよと上の句あくも。下詠句あらずもいひけ  
 つまば、今たのしむを、付る。今のやうよくさへ、こゝに  
 中ナカは、りのこゝに、ちよとあり。半ナカよあるを片ハつとひ。

片ハつよす詠を、詠をよぐよ連ハつとく。ちよ詠ハ片歌を連  
 哥の名たる。今も半ナカよとて、ちよとつと、ちよをを。  
 片ハつとひといふ。本末なる。一句を二條大岡兼良公乃  
 撰ハす。せしむ。詠波集あり。片句といふのせも、ちよ同記。  
 仁德之條曰ニ云ク。天皇直幸ニ女鳥王之所坐而。  
 坐其殿戸之闕上。於是女鳥坐機而織服。尔天  
 皇歌曰。  
イニスソノトノ、トノキニウニコ、ニメドリ、イニシテ、タテニ、オロニ、チスラ  
ニコトウケヒスニハシ

○賣行理能ハ女鳥  
 ○和賀意富岐美能  
 ハ我大君之○淤呂須

メドリノワガオホキミノオロスハタ  
 賣行理能。和賀意富岐美能。淤呂須波多。

波多ハ所織機ハ他  
賀多泥呂迦母ハ誰  
ウ為ウトクメト秘ト  
音通スルハ助語ハ  
誰者ヨウモナクモ  
アリ。

タガタ子ロカモ  
他賀多泥呂迦母。

凡哥ノ名ハ女鳥皇女ト納ク。妃トセんとナリ。一テ。隼総別皇  
子ト媒トシ。マサ時ニ隼総別皇子密ニ親娶ク。カウリトシ。傳  
ク。さび。志ノ。傳。ト。皇。女。支。ある。コ。ハ。ト。志。ル。一。め。さ。び。志。能。殿。子。臨。ま  
寸時。女鳥。捧。む。コ。ト。ある。を。覺。テ。上。傳。せ。り。傳。言。さ。り。傳。哥。乃  
志。ハ。隼。総。別。皇。子。能。裝。束。を。納。り。り。て。是。混。本。哥。ナ。リ。ト。シ。  
親。娶。る。コ。ト。を。納。り。ひ。や。ア。志。ル。コ。ト。を。傳。へ。り。ト。シ。

ハ雲滌抄云。混本哥ハ三十一字能内一句のふきく胡が  
乃夕うげはゆらぬらややす花の名ぞの。天皇の滌

分文字の敷あまのたかト。女鳥王答歌曰。

タカユクヤハヤブカワケノミオスヒ  
多迦由夕夜波夜夫佐和氣能美於須比

○多加由夕夜ハ高行  
ヤアリ。隼総トイフハ枕

ガ  
賀泥。

詞ハ波夜夫佐和氣  
能ハ隼総別之ハ美  
於須比賀泥ハ釋日  
本紀私記曰師説御  
裝束ハ

凡分ハ多ハ隼総別皇子の滌装束織ト云ク。久ハ天皇の  
爰ハ天皇隼総別皇子と密婚を云フコトナリ。久ハ天皇の  
よ。傳。せ。り。賣。杼。理。能。和。賀。意。富。岐。美。の。滌。方。ハ  
混本哥ハ一テ。女鳥王能あまのたかト云フコトナリ。歌ハ片分ハ

是ハ一首の本末をわらう。片分ハ一ハありて混  
本歌ト云フハ片分ト云フコトナリ。又片分ハ

短哥りて継ぎもアリ。日本紀仁徳之條曰十六  
年。秋七月戊寅朔。天皇以宮人桑田玖賀媛示

テミヤヒトクハダンソカヒメヲ

チカクツカフニヒトヲニクワレオモラマシトコノヲニナクヨリテキサキノチクミ  
近習舎人等曰朕欲愛是婦女苦皇后之妬不

能舎以經多年何徒棄其盛年乎即歌曰

彌能曾虛赴於彌能鳥苦咩鳥多例椰始

儼播務

○淋儼曾虛水底  
○赴八經○於淋能  
鳥苦咩鳥八臣の嬢  
子○多例ハ誰之  
○椰始儼播務ハ養  
りん

凡そ乃を政賀媛と云はば臣もたアハハ  
誰や一ふりのよ水底歴ハ思ふろ  
於是播磨國造

祖速待獨進之歌曰

彌箇始報破利摩破耶摩智以播區娜輸

加之古俱等望阿例椰始儼破務

○淋箇始報ハ三朝  
○破利摩破耶摩智  
ハ播磨速待ハ以播  
區椰輸ハ岩下す  
巖石を岩より洞  
下ハの耐人のち

凡そ此を詔勅の言さより巖石と云ふが  
即曰以政賀媛賜

速待云云天皇帝の御被ハ片奇少く速待

がく免る短歌なり延喜御集云菊宴之時中務

宮庭小とりてらば一の花を折るなりあふふふ

少むねせらねるを

那聖をよ行くぞりはるここと

とく末いたるをちとまへり

霜の中ようつぬ花をあそねと見侍

まよへて云○加之古  
俱等望ハ畏と  
も○阿例椰始儼  
破務ハ我養りん

はぐぬれ片句ハ混本歌の頭乃句カニをうりて後の片句ハ  
旋沃十カラ乃半十カラよめはよそふ御をいふすまは垣哥こ  
いづまふも一首ヒトクサは歌をわらうてよまは連歌あまは  
此方を清輔朝臣長代抄帝の連歌骨法入まわら  
し伊勢物語よ云むうへ宮歌うらふさく何さぶららの  
はが孫のあそわりうらふよ何乃あそむうたをひん  
よ〜や草葉よなうんさうが見ん  
やうあを男

はぐぬれ片句ハ混本歌の頭乃句をうりて後の片句ハ  
イガ〜り〜をたわやうふあは

或人云よ〜や草葉よなうんはぐぬれ伊勢物語抄よ云忘  
行つ〜るいふふああ〜るよ〜や草葉よなうんさうが見ん是ハ後日本  
紀のあふり〜るいふも後日本紀よ見んす又其比の  
あ乃す〜るいふあ〜るは〜る片句なるべし

齋宮女御集云

五月間地ほつりあはれつ〜るま〜るあは

是ハ清輔朝臣長連歌骨法よ出さうらうあま〜る  
片々之代草葉よ云開白殿下近衛御所女房ノ

車寄ノ前ニ人五六人女房ト言談而有支次テ薰  
物ヲ一囊被出人人競取之越中守顯成取見之已  
非薰物人々咲之分散翌日ニ又同所三人々程候此  
日ハ予モ候然間自女房中送書狀聞見之有奇  
薰物ト云ハ路々其のほと見へり

ト云云元句不覺也人々興ヲ遣各讓テ予心中ニ案様  
昨日此所ニ御坐ケ人々ノ御沙汰也トテ欲逃而可見  
讓無人默止バ予恥之由存之間虚薰物ト云古又有力

シト覺悟ス仍須更廻思之處如形竹篇云

きくぞうのみにすけらちよりいづる  
そらふにそのやうにもあらず

けじめの片をふくむとてあはれ短哥になぞり  
影いづれあはれとて片をふくむとてあはれ

又問は外あもほるく連歌の心なる何のや

答 古事記仁徳之條曰天皇為將

豊樂而幸行日女島之時於其島雁生卵シテセント亦召

○多々林岐波流ハ魂極  
之字知とく枕詞  
○字知能阿曾ハ  
ハ建内宿祢ト云ハ  
朝臣ト云ハ尾  
ト云ハ

トヨノアカリヲ イデマス ヒメ シニニ トキニ ソノシニカリウム コスナキメシテ

御く續日本紀上阿曾  
美と相臣となんか  
よむる。○那許曾波  
ハ汝をハ之。○余能那  
賀能比登ハ世の長の  
人。○蘇良美都。虚  
見。○夜麻登能久迺  
大和國之。○加理古牟  
雁子と生。○岐久夜  
ハ聞やなり。日本紀  
阿香豆辞菴柳菴  
等能區理現箇科  
古武等儼波企箇  
輪柳と何り。  
○多加比迦流ハ高照  
之日といふ枕詞。○比  
能美古ハ日の皇子  
○宇倍志許曾ハ宜

一こそそ実とつと目ト  
○斗比多麻閑ハ向多  
之。○麻許曾迹ハ城ハ  
○阿礼許曾波ハ我  
こそい。○余能那賀  
乃比登蘇良美都夜  
麻登能久通ハ加理  
古牟登ハ前註す。  
○伊麻多岐加受ハ未  
聞。○日本紀ハ夜輸  
添跡之。和我於朋積添  
波于倍儼于信儼和例  
鳥斗波輸儼阿企菟  
辞摩。柳菴等能俱  
理余箇利古武等。和  
例破担箇儒と何り  
意ハ同。○人  
○那賀美古夜ハ波  
皇子やなり。上卷夫

タケウチノスク子ノミヨトヲ  
建内宿禰命以歌問雁生卯之狀其歌曰

多加比迦流比能美古宇倍志許曾斗比  
多麻岐波流宇知能阿曾那許曾波余能  
那賀乃比登蘇良美都夜麻登能久迺爾  
加理古牟登岐久夜

於此ハ天皇の建内宿禰乃命なり。○ぎん  
あまは雁子とくむとくややとせまわ  
歌語曰  
於是建内宿禰以

多加比迦流比能美古宇倍志許曾斗比  
多麻閑麻許曾迺斗比多麻閑阿禮許曾

波余能那賀乃比登蘇良美都夜麻登能  
久迺爾加理古牟登伊麻陀岐加受

凡そ此の意ハ、こそい、つと目トの義ハ、我命なり。○世ト  
侍ト、やまの國ハ、雁乃子ト、むとく、い、ま、ひ、き、と、言、へ、ま、と、い、く。  
此白而、被給御琴歌曰

那賀美古夜都毘迺斯良牟登加理波古  
牟良斯

此者本岐歌之片歌也。是ハ建内宿禰のよめと、意ハ、天  
い、ま、は、ん、事、お、ま、り、お、て、雁、乃、子、と、く、む、と、く、い、ま、ひ、き、と、言、へ、ま、と、い、く。  
少く、は、國、乃、子、と、く、む、と、く、い、ま、ひ、き、と、言、へ、ま、と、い、く。







およのなるまふ〜や見え〜うり。末七字乃句と

ゆるぎく抄流へるは志の強弱〜ふん終又甫初

兼河寺なる。佛足石のふも。此類ひあし。余王子

亦歌曰

意布表余志。斯毘都久阿麻余。斯賀阿禮

婆。宇良胡本斯。祁牟志。毘都久志。毘

○意布表余志ハ余  
吉之○斯毘都久阿麻  
余ハ輔衝海人之上輔  
ハツキクも取也○斯  
賀阿禮婆ハ如此也  
北之○宇良胡本斯  
祁牟ハ宇良ハ心之  
志毘ハ志毘都久  
志毘ハ輔衝輔之

凡五首の分乃名ハ意富美夜能表登都波多傳と輔臣のよめと。  
表祁のこも能能継々々（る海）分ハ輔臣より付もあ〜のたつ浦ド  
と何さ〜のよめと王子も能能よみて汝を誅させ流人の又よめ  
か〜誅せ〜後ハ能〜と宇良胡本斯祁牟志毘都久志

日本紀武烈之條曰

躑躅從容而輔臣來挑太子與影媛間立由是

太子放影媛袖移廻向前立直當輔曰

之褒世能云云

輔臣答歌曰

飲瀾能古能耶陛耶奇羅奇枳瑜屢世登

耶瀾古

凡言ハ太子物部麿鹿火大連女影媛を聘〜媒人を影媛の宅  
よ〜影媛ハ輔臣ハ新ぬよ〜太子臨期と云流子遠人〜と云

○飲瀾能古能ハ臣の  
子之○耶陛耶ハ八重  
之耶ハ助語之○奇  
羅奇枳ハ唐垣之○  
瑜屢世登耶ハ敬也  
と云○瀾古ハ太子之

○之褒世能爲奇事  
記之同ハ前子註す

太子歌場

執影媛袖

太子歌場  
小立〜

太子歌場  
テニ

太子歌場  
ニテ

太子歌場  
ヲ

太子歌場  
ツテ

太子歌場  
ニ

太子歌場  
ハ

太子歌場  
ノ

太子歌場  
ヲ

そのまゝ、祢がりの海<sup>ツバ</sup>拓<sup>イナ</sup>榴<sup>ナギ</sup>市の巷<sup>ナギ</sup>に待<sup>ナギ</sup>なるといふ由<sup>ナギ</sup>是太子海拓榴市  
 の歌<sup>ナギ</sup>垣<sup>ナギ</sup>に立<sup>ナギ</sup>て影<sup>ナギ</sup>媛<sup>ナギ</sup>が袖<sup>ナギ</sup>とくく<sup>ナギ</sup>て<sup>ナギ</sup>係<sup>ナギ</sup>想<sup>ナギ</sup>し<sup>ナギ</sup>る<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>籾<sup>ナギ</sup>臣<sup>ナギ</sup>来<sup>ナギ</sup>つ<sup>ナギ</sup>て<sup>ナギ</sup>不<sup>ナギ</sup>能<sup>ナギ</sup>  
 なる<sup>ナギ</sup>とい<sup>ナギ</sup>う<sup>ナギ</sup>り<sup>ナギ</sup>ふ<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>こ<sup>ナギ</sup>ゝ<sup>ナギ</sup>ぬ<sup>ナギ</sup>ま<sup>ナギ</sup>ひ<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>ぬ<sup>ナギ</sup>を<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>わ<sup>ナギ</sup>流<sup>ナギ</sup>な<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>る<sup>ナギ</sup>志<sup>ナギ</sup>田<sup>ナギ</sup>比<sup>ナギ</sup>か<sup>ナギ</sup>い<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>飲<sup>ナギ</sup>  
 涿<sup>ナギ</sup>麻<sup>ナギ</sup>古<sup>ナギ</sup>麻<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>分<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>已<sup>ナギ</sup>影<sup>ナギ</sup>媛<sup>ナギ</sup>を<sup>ナギ</sup>八<sup>ナギ</sup>重<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>垣<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>築<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>わ<sup>ナギ</sup>太<sup>ナギ</sup>子<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>教<sup>ナギ</sup>な<sup>ナギ</sup>す<sup>ナギ</sup>ト  
 終<sup>ナギ</sup>え<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>日<sup>ナギ</sup>本<sup>ナギ</sup>紀<sup>ナギ</sup>古<sup>ナギ</sup>事<sup>ナギ</sup>記<sup>ナギ</sup>遠<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>こ<sup>ナギ</sup>多<sup>ナギ</sup>し<sup>ナギ</sup>之<sup>ナギ</sup>褒<sup>ナギ</sup>世<sup>ナギ</sup>麻<sup>ナギ</sup>云<sup>ナギ</sup>云<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>流<sup>ナギ</sup>な<sup>ナギ</sup>古<sup>ナギ</sup>事<sup>ナギ</sup>記<sup>ナギ</sup>  
 一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>籾<sup>ナギ</sup>臣<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>意<sup>ナギ</sup>富<sup>ナギ</sup>岐<sup>ナギ</sup>美<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>許<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>呂<sup>ナギ</sup>素<sup>ナギ</sup>由<sup>ナギ</sup>良<sup>ナギ</sup>美<sup>ナギ</sup>云<sup>ナギ</sup>云<sup>ナギ</sup>乃<sup>ナギ</sup>奇<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>い<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>す<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>流<sup>ナギ</sup>な<sup>ナギ</sup>  
 なる<sup>ナギ</sup>日<sup>ナギ</sup>本<sup>ナギ</sup>紀<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>籾<sup>ナギ</sup>臣<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>る<sup>ナギ</sup>  
 片<sup>ナギ</sup>お<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>ま<sup>ナギ</sup>ば<sup>ナギ</sup>な<sup>ナギ</sup>す<sup>ナギ</sup>べ<sup>ナギ</sup>記<sup>ナギ</sup>ぬ<sup>ナギ</sup>  
 籾<sup>ナギ</sup>臣<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>乃<sup>ナギ</sup>を<sup>ナギ</sup>や<sup>ナギ</sup>す<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>表<sup>ナギ</sup>祁<sup>ナギ</sup>命<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>  
 末<sup>ナギ</sup>を<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>ひ<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>連<sup>ナギ</sup>哥<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>ら<sup>ナギ</sup>と<sup>ナギ</sup>互<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>み<sup>ナギ</sup>ま<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>め<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>わ<sup>ナギ</sup>

短<sup>ナギ</sup>哥<sup>ナギ</sup>旋<sup>ナギ</sup>頭<sup>ナギ</sup>歌<sup>ナギ</sup>な<sup>ナギ</sup>ら<sup>ナギ</sup>づ<sup>ナギ</sup>つ<sup>ナギ</sup>は<sup>ナギ</sup>ま<sup>ナギ</sup>も<sup>ナギ</sup>迷<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>後<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>る<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>  
 な<sup>ナギ</sup>べ<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>上<sup>ナギ</sup>つ<sup>ナギ</sup>代<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>多<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>こ<sup>ナギ</sup>ろ<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>ま<sup>ナギ</sup>た<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>む<sup>ナギ</sup>め<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>わ<sup>ナギ</sup>今<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>な<sup>ナギ</sup>ら<sup>ナギ</sup>  
 一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>も<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>は<sup>ナギ</sup>げ<sup>ナギ</sup>つ<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>べ<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>今<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>本<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>を<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>その<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>  
 一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>も<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>は<sup>ナギ</sup>げ<sup>ナギ</sup>つ<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>べ<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>今<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>本<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>を<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>その<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>

一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>も<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>は<sup>ナギ</sup>げ<sup>ナギ</sup>つ<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>べ<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>今<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>本<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>を<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>その<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>  
 一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>も<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>は<sup>ナギ</sup>げ<sup>ナギ</sup>つ<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>べ<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>今<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>本<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>を<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>その<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>  
 一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>も<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>は<sup>ナギ</sup>げ<sup>ナギ</sup>つ<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>べ<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>今<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>本<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>を<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>その<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>  
 一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>も<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>は<sup>ナギ</sup>げ<sup>ナギ</sup>つ<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>べ<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>今<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>本<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>を<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>その<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>  
 一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>も<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>は<sup>ナギ</sup>げ<sup>ナギ</sup>つ<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>べ<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>今<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>本<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>を<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>その<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>  
 一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>も<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>は<sup>ナギ</sup>げ<sup>ナギ</sup>つ<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>べ<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>今<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>本<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>を<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>その<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>  
 一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>も<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>は<sup>ナギ</sup>げ<sup>ナギ</sup>つ<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>べ<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>今<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>本<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>を<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>その<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>  
 一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>も<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>は<sup>ナギ</sup>げ<sup>ナギ</sup>つ<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>べ<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>今<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>本<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>を<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>その<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>  
 一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>も<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>は<sup>ナギ</sup>げ<sup>ナギ</sup>つ<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>べ<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>今<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>本<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>を<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>その<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>  
 一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>も<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>は<sup>ナギ</sup>げ<sup>ナギ</sup>つ<sup>ナギ</sup>あ<sup>ナギ</sup>べ<sup>ナギ</sup>く<sup>ナギ</sup>一<sup>ナギ</sup>に<sup>ナギ</sup>今<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>の<sup>ナギ</sup>本<sup>ナギ</sup>よ<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>を<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>終<sup>ナギ</sup>その<sup>ナギ</sup>末<sup>ナギ</sup>

松乃波のうらむるものにて<sup>アメツキ</sup>玄城のほしく回ども  
すのび田草ももろろあしん子ハ田面多志乃  
桑ぐさのこしき稲葉も枯も果ぬべし連歌を教  
まろろぎ種ばもあしをわらべうづあつとわ  
よりく抄もやんこまほべし

問萬葉集子連歌ありや

答 萬葉集第八<sup>アルヒト</sup>或者贈<sup>ル</sup>屋歌二首

手母須麻爾殖之茅子爾也還者

○手母須麻爾<sup>ハ</sup>休<sup>メ</sup>人

雖見不飽情將盡

凡分れまのやもやすめ極<sup>ニ</sup>も<sup>シ</sup>だ<sup>ニ</sup>やう<sup>ハ</sup>見ま<sup>シ</sup>も何よ  
も<sup>シ</sup>ぞ我<sup>ノ</sup>心<sup>ヲ</sup>つ<sup>キ</sup>と<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>こ</sup>ろ<sup>ハ</sup>を<sup>も</sup>た<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>あ<sup>リ</sup>こ<sup>ノ</sup>

衣手爾水澁付左右殖之田乎

引板吾波倍真守有栗子

○衣手ハ袖<sup>ノ</sup>水澁ハ  
水<sup>ノ</sup>び<sup>ノ</sup>引板ハ鹿  
な<sup>ノ</sup>の<sup>ひ</sup>つ<sup>ノ</sup>板<sup>ハ</sup>  
本<sup>ノ</sup>と<sup>ス</sup>へ<sup>ク</sup>倍<sup>ヲ</sup>付  
引<sup>ノ</sup>の<sup>の</sup>波<sup>ノ</sup>倍  
延<sup>ノ</sup>引板<sup>ハ</sup>細<sup>ハ</sup>  
と<sup>ス</sup>へ<sup>ク</sup>

凡哥乃<sup>ニ</sup>夏ハ袖<sup>ハ</sup>水澁付<sup>マ</sup>下立<sup>キ</sup>極<sup>ニ</sup>田<sup>ヲ</sup>秋<sup>ニ</sup>引板<sup>ヲ</sup>我  
抄<sup>ス</sup>へ<sup>ク</sup>ち<sup>ノ</sup>が<sup>ク</sup>は<sup>ハ</sup>き<sup>ト</sup>も<sup>シ</sup>あ<sup>リ</sup>の<sup>こ</sup>ろ<sup>ハ</sup>を<sup>も</sup>た<sup>ス</sup>と<sup>ス</sup>あ<sup>リ</sup>こ<sup>ノ</sup>  
一<sup>ト</sup>と<sup>ス</sup>り<sup>ノ</sup>と<sup>ス</sup>め<sup>ニ</sup>カ<sup>ニ</sup>ノ<sup>ク</sup>ラ<sup>ニ</sup>ニ<sup>ニ</sup>  
の<sup>の</sup>乃<sup>ハ</sup>後<sup>ヲ</sup>なり<sup>ニ</sup>カ<sup>ニ</sup>ノ<sup>ク</sup>ラ<sup>ニ</sup>ニ<sup>ニ</sup>  
尼作<sup>ニ</sup>頭<sup>ニ</sup>并<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>伴<sup>ニ</sup>宿<sup>ニ</sup>禰<sup>ニ</sup>家<sup>ニ</sup>持<sup>テ</sup>所<sup>ヲ</sup>詠<sup>シ</sup>

尼續末句和歌一首

佐保河之<sup>ハ</sup>水<sup>ハ</sup>乎<sup>シ</sup>塞<sup>リ</sup>上<sup>ニ</sup>而<sup>シ</sup>殖<sup>シ</sup>之<sup>ノ</sup>田<sup>乎</sup>



